

黄色：チェンジ必要な箇所

青：専門用語・名所など リサーチ／チェックが必要

ピンク：大事にしたい文

エキサイティングなことはなんでも、一度はやってみる価値がある—ベティー・ペムブ
ロック・ヘルドライヒは、そう信じてダイナミックな人生を歩んできました。彼女自身
が操縦する飛行機が墜落した際にも「生きていて幸運だったわ」と、ポジティブに捉え
その後のチャレンジを諦めることはありませんでした。

ウェーブ・ウーマンは (Charming and intimate) な伝記であり、好奇心豊かな母に向けた娘
からのラブレターです。(彼女の人生色々なことがありました) 1936年にはオリン
ピックに出場するためにハードな水泳の訓練を受けたり、直観を信じて駆け落ちした結
果、愛への厳しい教訓も学びました。女性起業家として創造性と自給自足への意欲を
もって、ベティは彫刻家、歯科衛生士、宝石商、漁師、陶芸家、詩人としての経験を通
して彼女なりの人生の意味を見いだすことができました。

ハワイのマカハビーチでビッグウェーブがクラッシュするスリルに触発された41歳の母
親は、サーフボードを手に取り、恐怖心を克服し、チャンピオンになることを目標に出
場を決意しました。ウェーブ・ウーマンは、自信、充実感、そして真の幸せを求めるす
べての女性(と男性)に向けて明確に語りかけています。以下は、この本からの抜粋で
す。

ザ・マカハ・ブレイク

ワイキキでは観光客にローカルにも人気のサーフブレイクポイントが点在しています：
キャッスルズ、パブリックス、クンハス、クイーンズ、カヌーズ、それからポピュラー
ズ。けれど、より強い刺激を求めるものたちを魅了したのは、オアフ島西側、マカハの
冬に現れる巨大な波、ウィンター・スウェルでした。10月から3月にかけて、マカハの
波は最高潮に達します。朝は穏やかな波が昼過ぎには20フィートから30フィートの大波に
なることもあります。

一般的に、マカハは大きく分けて4つのブレイクポイントがあります。3つは右側にブ
レイクする波(レギュラー)で、1つは左側にブレイクする(ゲーフィー)としてブレ
イクしますが、途中からレギュラーに変わります。それぞれのブレイクポイントは波
やうねりの大きさによって異なり、多少の違いがあります。ケプヒ・ポイントでは、湾
のカエナ・ポイント側に、18から20フィートの高波がブレイク；ボウルのポイントで
は、ゲーフィーの波としてブレイクし、中頃から15、20フィートのレギュラーの波に
変わります；ミッドセクションでは10から20フィートの波があり、そのさらに奥に位

置するブローホールでは6から10フィートの波があります。サンゴ礁に穴が開いていることで、海水が吹き上げられ、勾配も出るので波に乗りやすくなります。そこには波の小さいインサイドブレイクもあります。

しかしながら私たちは一度もそれらのポイントやボウルサイズの波でサーフィンをすることはありませんでした。私たちにとってその波はとても大き過ぎました。

私は母と二人でワイキキとマカハの海を7年ほどサーフィンしました。私たちにとってサーフィンは単なるスポーツではなく、ライフスタイルであり、人生の大切な時期に私たちを結びつけてくれたものでした。「いつ、どこへサーフィンに行こうか」「その日はお互いどんな波乗りができたか」など、会話の内容や頭の中はいつもサーフィンのことばかりでした。私たちと趣味を共有した人々は生涯の友達になり、スリルや危険を犯しながらも、習熟していくことへの満足感に私たちは皆夢中になっていました。サーフィンを通して自身に挑戦し続けることで、肉体的にも精神的にも強くなっていったのでした。

海の美しさや自然との一体感は、私たちに幸福感を与えてくれました。それと同じくらい重要なのは、私たちが日常の生活から解放してくれたことです。

サーフィンに熱中していた私たちでも、1943年ノース・ショアのワイメア湾で起きたモンスター・ウェーブ（モンスター級の波）の不穏な話には脅かされました。

ディッキー・クロスが命を落とし、ウッディー・ブラウンは水着をはぎ取られながら陸に打ち上げられ、かろうじて生き延びたといえます。

ベティー（母）と私は、バジー・トレントや、ピーター・コール、ジョージ・ダウニングが乗るほどの波ではなくても、より大きくて立派な波に憧れていました。

現代のビッグウェーブサーファー、アンドレア・モラーはビッグウェーブに乗り始めた時の感覚をこう説明しています；「一瞬の静寂のようだよ。そこにはあなたと大海原、水面を走るボードのパタパタパタという音だけなの。」モラーは私たちが敢行した波よりも遥かに大きな波に乗っていますが、私たちが経験したことを言葉に表していません。「ドロップの後波の壁をくぐると」、と彼女は付け加えました「まるで無音なガラスの世界に吸い込まれて時間が止まっているような感覚になるの。危険なのはわかっているけども夢中になってしまうわ。』」

1959年、高校卒業を間近に控えていた早春のある日、私と母は明け方に起きて庭から波のチェックをしました。すると、私たちが立っている場所から6-8フィートのガラスのような波が見えました。私たちの身長よりはるかに大きな波でしたが衝動に耐えられず、サーフボードを念入りにワックスがけして（こんな高波の中で足を滑らせるわけにはいきません）脇下に抱えビーチに向かいました。冷えた砂のカリカリした質感を素足で感じながら入り江沿いを隣同士で歩きました。幼い頃、私はいつも母と過ごす時間に憧れていたが、母はいつも仕事で忙しかったのです。私にはたくさんの気晴らしになるもの／娯楽（Diversions:馬、プール、10エーカーのスペースなど）がありましたが、

いつも何か物足りないとかんじていました。それは母との時間です。でもようやく思春期後半になりサーフィンを通じて母との時間を見つけました。あの朝母と一緒に歩いて感じた安心感、サーフィンに対する期待感を共有できたことは、未知なる大人の世界を歩み出した私にはとても大切な時間でした。

パドリングを最小限に抑えるために、私たちは砂地の水路を抜けてリーフの端まで歩きました。右手には金色の円盤／輝く太陽が山の上に昇ってきていて、山間を柔らかな風が流れていました。

砂浜に打ち上げられたククイナツツの鼻につくにおいを感じながら、寄せ波をよけて馴染みのブレイクエリアに進みます。それはコーラルヘッドを過ぎたところで、波を待つのに好ましい場所でした。私たちが到着するころにはすでにフレッド・ヴァン・ダイクとジョニー・マクマホン、ワイキキにあるメンズストアのマネージャー、がボードに座って波を待っていました。互いに“Howzit”（ハウズィツ）と挨拶を交わし、今日のサーフコンディションや母のプロジェクトの話など、世間話をしました。

透き通った青緑の海水に浸かりながら、遠くにエメラルドのマカハバレーを見上げ海のパワーと癒しを吸収する。これ以上ないほど素敵な1日の始まり方だと私たちは思いました。それから私たちは海を眺めながら、地平線上に新たな水の山ができていないか、波が押し寄せてくる最初の兆候がないかを見ながら待っていました。

最初の波が姿を現すと同時にアドレナリンが溢れ出します。でも、私と母はボードに座ってじっとしたまま、先に来て待っていたフレッドとジョニーが波に乗るのを見ていました。次に来る波は私たちのものです。新しい波が見えると私たちは岸に体を向けて、ボードに寝転び波を待ちました。近づいてくる波に合わせて必死にパドルすると、水中で徐々にボードが上昇するのを感じます。数秒後、波の力がパドリングに代わってボードを押してくれたので両手をついて立ち上がり右向きに波の壁を降りて行きました。まるで空を飛んでいるような感覚です。母も同じように私の右側で波乗りを楽しんでいました。私たちはお互い（波の壁を打ち砕くような）カットバックの前後にスピードの強弱をつけ、時間稼ぎしながら一緒に楽しみました。

それは長く、忘れることのない瞬間です。お互いのスタイルや動きを知っているような深い共感。それは、波と、海と、お互いに自然とつながる体験でした。

半年後、私のサーフィンに対する見方は変わることにになります。ハレイワでサーフィング中、胸をえぐられるような思いを経験することになるのです。その数ヶ月後、私と母は、マカハを離れ母娘サーフィンデュオとして海外を旅し、そのさらに数ヶ月後、私は再度マカハを離れ新妻としてカリフォルニアのサンホゼに引っ越すことになりました。私と母の人生はそれぞれの方向に動き出しますが、時に交差し、時に離れ離れになり、たまに並行して進むのでした。しかしあの朝、母と一緒に乗った波を思い出すと、私たちはどれほど幸運だったか、考えずにはられません。

「アメリア・イヤーハート、フリーダ・カーロ、エミリーディキンソン、それからエスター・ウィリアムズを混ぜると出来上がるのが、ベティー・ペムブローク・ヘルドライヒ・ウィンステッド。20世期のワンダーウーマンだ」 -ベン・マーカス、サーファーマガジン元編集者

「ウェイブ・ウーマン ベティー・ヘルドライヒは私が尊敬する人です。（women and men who are one hundred percent, authentically themselves.）素の自分をさらけ出している。私は彼女のポジティブな回復力／復元力／レジリエンスと人生への情熱に刺激／影響を受けています。」 -カリッサ・ムーア プロサーファー／女子ワールドツアーチャンピオン